

診察室こぼれ話

2024 年の年末ころから 2025 年にかけて、季節性インフルエンザが流行しています。インフルエンザはインフルエンザウイルスが鼻腔、咽頭、喉頭および肺に感染して引き起こされる伝染性の呼吸器疾患です。65 歳以上の高齢者、幼児、基礎疾患のある人など、一部の人は重篤なインフルエンザの合併症のリスクが高くなります。そのため、インフルエンザワクチンの接種が必要となります。

ワクチン接種による免疫防御力は接種後 2 週間後から効果が発現し、5 カ月間ほど持続します。その後は時間経過とともに低下します。ですので、ちょうどインフルエンザが流行する年末ごろにワクチンの効果が発揮されるように 10 月～11 月ごろにワクチン接種することをおすすめします。

年毎に流行するインフルエンザウイルスの型が異なるので、ワクチンは毎年、世界保健機関（WHO）および米国疾病予防管理センター（CDC）の勧告に基づき、次に流行するのが予想されるウイルスが含まれるように製造されます。

インフルエンザウイルスには、大きく分けて A 型と B 型の 2 種類があり、インフルエンザワクチンは A 型株の 2 種類、B 型株の 2 種類の合計 4 種類のウイルス株で構成された 4 価ワクチ

ンとなっています。

インフルエンザワクチンの接種によって、医療機関の受診が減少、入院する割合の低下、死亡の予防効果があると推定されています。

海外のデータですが、インフルエンザで入院した成人のうち、ワクチン接種した患者は、未接種の患者に比較して、集中治療室に入室する可能性が 59%低いことや、入院日数も 4 日間短くなったという報告もあります。

一方、妊娠中の女性にとってもインフルエンザワクチン接種は有益で、接種によって妊婦がインフルエンザで入院するリスクが平均 40%減少したという報告が米国でなされました。

ワクチンは母体で産生された抗体が胎盤を通して胎児に移行するので、生後 6 か月までの乳児のインフルエンザ罹患率が減少するという報告もあります。このように妊娠中のインフルエンザの予防接種は妊婦のみならず、乳児が生後数カ月間、インフルエンザから守られることが示されています。

ワクチンを接種していてもインフルエンザに罹患する人もおられますが、それでも重症化する可能性が低いので、接種は有効だといわれています。

（厚労省のホームページ、総合診療（医学書院）を参照）



あれこれ情報版



昨年12月からインフルエンザが大流行しています。その中でもコロナ感染症も流行っており、両方の検査をしないと、症状からだけではなかなか見分けが付きません。発熱外来枠を以前の2倍に増やしていますが、それでも追いつかない状況です。



— 昨年のクリスマスに購入したポインセチア。1年かけて世話をし、夏過ぎには青々と葉が茂り、赤くなるのを楽しみにしていました。しかし、一向に赤くならない。一生懸命温かく陽の当たる場所に置いていたのですが、調べたところ気温だけでなく、日照時間がキーポイントでした。夜の暗い時間が昼の時間より長くなる日が40日以上あれば赤くなるそうです。慌てて暗い部屋に置いたり出したり。しかし時すでに遅し。クリスマス10日前。未だに赤くなりませんが今年再挑戦してみたいと思います。



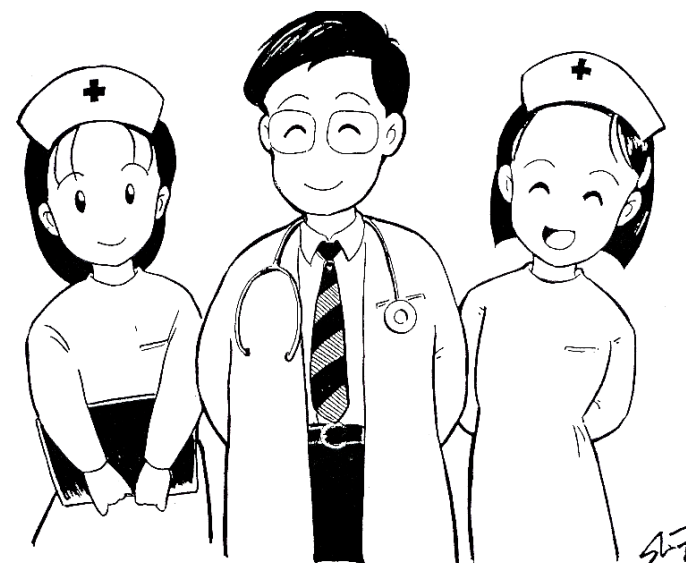
高知県「にこ淵」へ行って来ました。仁淀川の「仁淀ブルー」がとても神秘的で美しい滝つぼでした。



昨年12月から電子カルテのシステムを入れ替えました。また、電子処方箋にも対応できるようになりました。

すこやか通信

'25 1-2号 Vol.164



内科・循環器内科・小児科・皮膚科・泌尿器科

神戸市東灘区深江北町 2-8-26

☎078-431-0696

児島医院